

一般的に映画監督として知られる野村芳太郎（1919~2005）は野村芳亭を父に持ち、その芳亭氏はいえば、松竹蒲田の映画監督の草分け的存在で撮影所長も務めた人物であり、そのため蒲田撮影所内の社宅に住み、芳太郎少年は幼少より生活の中に映画が溶け込む環境で育つという実に恵まれた境遇にありました。暁星中学から慶應大学芸術科に進み、戦争により繰上げ卒業し、松竹大船撮影所助監督部に入社します。父が映画監督だったため、他の職業になることはまったく考えなかったと言います。

1942年に応召、1946年にビルマから復員後復職し、助監督として家城巳代治、川島雄三、黒澤明らにつき、同期に小林正樹がいました。1952年助監督のまま中篇映画『鳩』で監督デビューします。（二本立て興行が本格化したため、松竹では若手を起用し制作、本数確保を間に合わせた事情があり、他社も事情は変わらなかったようです）しかも、この作品でブルーリボン新人監督賞を獲得し将来を大いに囑望されます。1953年には正式に監督に昇進し、その一作目は『鞍馬天狗』シリーズの一作というものでした。

野村芳太郎といえば、一貫して松竹で撮り続け、戦後松竹の代表的作家、それも所謂プログラム・ピクチャの中心的担い手として活躍し、実に多岐に渡る作品を発表しています。おそらく100本近くの作品に上るのではないかと思います。また、自作の脚本を書くほかに、共同脚本として山田洋次『二階の他人』（1961 山田洋次のデビュー作）加藤泰『人生劇場』『花と龍』『宮本武蔵』などがあります。加藤泰との古くからの友情は名高く、加藤泰が松竹で作品を撮るに当たってはプロデューサー的手腕も発揮しています。そして、そのプロデュース業としては、大ヒット作品となった森谷司郎『八甲田山』（1977）山田洋次『キネマの天地』（1986）を共同で務めています。さまざまなジャンルの作品をそつなく撮り上げる手腕に加え、監督業、脚本家業、プロデューサー業をこなしていく姿はまさに出自同様根っからの映画人と言えるでしょう。

順当に代表作を挙げるとすれば、『張込み』（1958）『拝啓天皇陛下様』（1963）『砂の器』（1974）『八つ墓村』（1997）『事件』（1978）『鬼畜』（1978）『疑惑』（1983）ということになるでしょうが、（いずれも名作です。特に『事件』以降のミステリータッチの法廷劇は見応えのある作品が続きます）今回は『五辨の椿』（1964）と『昭和枯れすすき』（1975）について触れます。

『五辨の椿』は、インターミッションの入る162分の大作で、山本周五郎の原作を井出雅人が脚色した復讐をテーマにした時代劇です。大店の娘として生まれたおしの（岩下志麻）の波乱に満ちた人生、女性をたぶらかし食い物にする男たちに対する復讐を遂げていく物語であり、出生の秘密も一つの重要な要素となります。フェミニズムを前面に出した作品とも言えます。冒頭10分程度で話の筋が飲み込めたような気がするのですが、そこからは山本周五郎という稀有なストーリーテラーがいて、井出雅人という名脚本家がいて、そして野村芳太郎の演出の妙が滲み出してくるようには物語を彩っていきます。当時23歳の岩下志麻の力演が光ります。この役は、桑野みゆき（岩下志麻より1歳歳年下）ではなく、やはり岩下志麻だと確信します。（桑野みゆきは同年に『夜の片鱗』で汚れ役を大胆に演じ女優としての実力を十分に見せつけてくれます）男尊女卑の時代、善悪の区別が女性にとって付けにくい時代に、正義と悪の判断に懊悩する姿を岩下志麻は

堂々と演じます。そこには、小津安二郎作品に出てくるお人形のような岩下志麻の姿は微塵ありません。数ある山本周五郎作品の映画化作品の中でも重要な位置を占める作品であることに間違いありません。

そして、『昭和枯れすすき』ですが、松竹が一時期確立した歌謡曲映画化路線の中の一作かとも思ってしまうのですが、差に非ず伝統の小市民に焦点を当てた人間ドラマが展開されています。原作は結城昌治の「ヤクザな妹」、脚本は新藤兼人。野村芳太郎は以前同じ結城昌治原作で『白昼堂々』（1968）という大凡作を撮ったことがあり、正直本作への期待は薄いものでした。しかし、これまた、差に非ずでした。「昭和枯れすすき」は1974年に大ヒットを飛ばした「さくらと一郎」の異色デュエット曲で独特の雰囲気と臭いを感じます。松竹には作品のパターンの一つとして「賢弟愚兄」というのがあり、そのヴァリエーションとして一連の『男はつらいよ』（寅次郎とさくらの関係）作品群がありますが、本作は「愚妹賢兄」の形態をとります。警視庁の刑事である兄（高橋英樹）と洋裁学校をいつしか辞めてしまい新宿近辺を彷徨い、チンピラと付き合うようになった不良少女の妹（秋吉久美子）の物語。兄の追う殺人事件の容疑者に妹が該当し、兄妹仲は崩れそうになるが、という展開になります。いかにも昭和の劇であり、その臭みが残ります。東北（兄妹の出身地）、父親の出稼ぎと出奔、一家離散、残された兄妹といった昭和的悲劇の要素が詰まり、そこには濃密な人間関係が生々しく存在し、息詰まりそうな圧迫感があります。また、時代の流れと企業の要請のもとに大衆映画を多作してきた野村芳太郎の映画作家としてのしたかかな強靱さが潜んでいるように思えるのです。基本的に松竹映画の真髄を受け継ぎ、平凡な小市民（市井の人たちと言った方がよいのか）の喜怒哀楽を凝視する作家精神基になったのは、父親譲りの大衆映画づくりの精神と一兵卒として戦争を体験した戦中派精神だったのかもしれませんが。大島渚、篠田正浩、吉田喜重が松竹ヌーヴェルヴァーグとして颯爽と登場した頃、世代的には一回り上に当たる野村芳太郎はひたすらプログラムピクチャの制作に追われていたこととなります。（監督作品は1960年に4本、1961年に3本、1962年にも3本という多作）

映画評論家の山根貞男は、野村芳太郎を評して「庶民が逃れようもなく、かかわって生きる日本の風土を常に視野に入れる」人物であり、「風景の重みがドラマの深さを表現する」こともあり、このことでは『砂の器』で集大成されたと評します。また、『砂の器』を「松本清張原作の推理映画だが、日本各地の四季折々の美しい風景を捉えつつ、むしろその風景自体が一個の犯罪者を意味出すと、この映画は主張してやまない」とまで言います。

野村芳太郎の描く風景、それは日本各地の美しい風景であり、野村作品に登場する人たちの精神構造をも含むものですが、それはある種日本人にとっての原風景でもあり、だからそこ人々の琴線に触れるものでもあります。松本清張は自作「黒地の絵」を映画化するため1978年に映画プロダクション「霧プロ」を設立し、野村芳太郎もこれに参加しますが、1983年の『迷走地図』で確執が生まれ1984年に解散となってしまいます。もともと野村芳太郎と松本清張作品、野村芳太郎と松本清張との人間関係は深いものでしたが、ここにも映画界のよくある決別のドラマが生まれます。野村芳太郎も1985年のアガサ・クリスティ原作の『危険な女たち』を最後に監督活動に終止符を打ちます。この頃まだ60代半ばであり、まだまだ創作意欲も旺盛であったはずではないかと思われるのですが、残念な寂しい幕引きとなってしまいました。